

# 揺れ燃える佐賀・10月1日 MOX装荷延期を勝ち取った緒戦の勝利 「まだ、これから」ー10月15日 MOX装荷開始の佐賀

「大きな声ではありません。いのちの声は大きいのです」



## ◆10月1日 MOX装荷延期を勝ち取る

9月30日、九州電力は10月3日に玄海原発3号機にMOX燃料の装荷を開始すると突如発表した。翌10月1日の県議会は、議会開催中（最終日は10月2日）にもかかわらず装荷を発表した九電と、それをそのまま受け入れた県知事に対する批判の声で揺れていた。

県庁に着くなり、「自民党若手議員を中心に、装荷発表に批判が出ている」と知らされ、緊迫した雰囲気はすぐに伝わってきた。11時から開催予定の議会は遅れに遅れ、自民党の総会や議会運営委員会の開催を知らせる管内放送が繰り返されていた。「プルサーマルと佐賀県の100年を考える会」等の呼びかけで、市民が県庁に集まってきた。県議会議長宛の緊急要望書を



県議会への要請行動

提出したり、各会派を回ったり、記者会見等々めまぐるしく動いた。結局、最大会派の自民党がまとめ、全会派一致で「MOX装荷のスケジュール見直しを九電に伝えない限り審議を拒否する」ことで一致し、議長が知事に申し入れた。

議会の基本的な姿勢は、議会での審議中に装荷スケジュールを発表したことに対する「議会軽視」という形式を問題にした。この9月議会では、関電MOXペレット不合格問題や、使用済MOX燃料の処理方策等が議論されていた。9月17日には、自民党若手議員が、九電MOXに関電不合格品が混ざっていないのか、関電と比較して九電の自主検査の項目・内容と検査結果を調査し、議会中に報告するよう要求した。これに対して県のくらし環境本部長は、議会後に調べて資料を出すと答弁した（「議会後」とは不十分だが）。このように、「議会軽視」は単に日程の問題ではなく、九電MOX燃料の安全性等を巡って議会で議論されている最中に、それを無視したことへの批判を含むものであった。

議長の申し入れを受け、知事は九電に連絡した。九電はこれを受け入れ、午後3時半頃から始まった議会で知事が延期決定を報告した。しかし、知事自ら反省の弁はなく、他人事のように3日の装荷が延期になったことを短く議会に報告しただけだった。

議会が開かれていた頃、市民は安全対策室と交渉。知事室からできるだけ遠ざけるためか、県庁本館から離れた別館での交渉だった。約40名の参加者は、県議会中に九電が装荷を発表したことについて、「県としておかしいとは思わないのか」「県としての判断はないのか」等々怒りの発言が続いた。議会で答弁した九電の自主検査に関する調査はどうなっているのかと問われると、「現在調査中」と繰り返すだけ。さらに、「九電からはデータはもらっていない、提出も求めている」としながら「我々がきちんととりまとめる」と安全対策室の課長が語気を強める。市民からは、「それでどうやって九電の自主検査の内容を確認するのか」、「正式に関電や国に問い合わせしていないのか」と批判が続く。最後は、県議会に調査結果を報告した直後に市民にも報告するよう求め、田代課長はうなずき、1時間半の交渉を終えた。

翌2日の議会最終日は、午前中に九電副社長が議会運営委員会理事会で陳謝することから始まった。11時開始予定の議会はまた大幅に遅れ、午後2時からの開始となった。プルサーマル延期を求める請願に対して、自民党が党議拘束をはずすが注目されたが、結局自民党の動きはなく、請願は否決され、9月議会は終了した。

しかしそれでも、実際にMOX装荷は延期された。九電と知事は、県民の意思を軽く扱います

ぎた。議会で自主検査問題等が具体的に議論になった背景には、県民のねばり強い運動がある。そして連携した全国の反プルサーマルの運動があった。その意味で、反対運動は、緒戦の勝利を勝ち取った。

### ●姑息な15日のMOX装荷開始―「まだ、これから」「負ける気がしない」

15日の県庁ホールには朝早くから多くの市民が集まり、緊急の抗議行動が行われた。県会自民党が12日に「MOX装荷と自主検査問題を切り離す」と総会で決定した。これを待ってましたとばかりに、九電は前日14日に装荷を発表した。11時半頃に、抗議声明を読み上げ、くらし環境副本部長に手渡した。約50名の市民と多くのマスコミに取り囲まれた副本部長は、「知事に伝えます」とだけ答えた。自主検査問題に関する県の調査結果も出ていないのに、装荷を認めた県と県議会に対し市民は怒り心頭だった。12時から県との交渉が行われた。「国が、国が・・・」と繰り返す県の職員に対して、これも国ですと、7日に東京で行われた保安院交渉のテープが流された。「九電MOXに閩電不合格品が混ざっている可能性は否定できない」と保安院が語った部分について、県の職員は「保安院が話しているのですか?」「声だけでは分からない」などと言いだし、強い批判を受けた。佐賀新聞でも報道されていることなのだ。それでも、「国の輸入燃料体検査に合格している。国が安全を確認している」と繰り返す。議会で約束した九電の自主検査の調査については、閩電と比較するのではなく、九電の自主検査を調べるだけ等と語りだし、「何のための自主検査調査なのか」と市民は口々に批判した。「国が、国がと言うが、東京に行ってよく分かった。国は九電が言ってることを繰り返しているだけ。県は県民の安全を守らないのか」と怒りの声が沸く。保安院を呼んで説明するようにと要求して、1時間の交渉は締めくくられた。

その後、持参されたお弁当を皆さんと楽しくいただき、一人ずつ自己紹介と思いを語り合った。装荷が開始されたことへの怒りや悔しさは皆同じだが、それでも皆さんの顔は明るく、「こんな無茶が続くはずがない」「子や孫のためにがんばる」「これからだ。絶対とめる」、「運動は広がっている」「負ける気がしない」と自然体で話された。自分たちの側に正当性があることを、3年半前の住民投票運動から続く運動とこの間のめまぐるしい動きの中で、強く確信していることが伝わってきた。

最後に県庁見学をして帰ろうということになった。知事室横の秘書課の部屋の前に着くと、職員が入口に立ちはだかって出迎えていた。3年半前からずっと要求している「知事に会わせてほしい」との思いを参加者がそれぞれに語った。警備担当課の職員は、「面会の強要は禁じられています」「通行人のじゃまになります」「大声を出さないで」と繰り返す。通行のじゃまにならないように廊下の両脇で約30名がならび、たいした大声も出していない。やりとりが続くなかで、また職員が「大声を出さないで」と大声で注意する。すると、年配の女性の方が、「大きな声ではありません」と言われ（そうそうと思っていると）、続けて「いのちの声は大きいのです」と。「大きな声ではありません。いのちの声は大きいのです」。この言葉に、佐賀の人たちの心と強さが凝縮されている。

2時間にも渡る廊下でのやりとりは、知事への面会と、保安院を呼んで説明会を開くことを要求して終わった。

MOX燃料は装荷されたが、プルサーマルを止めるため、佐賀の粘り強い運動は続く。(W)

